

緑あふれる軽井沢の別荘で
心豊かなひと時を綴るエッセー

軽井沢でアートを

文・濃木ここあ

ピーター・J・マクミラン氏のお話

翻 訳家のピーター・J・マクミラン氏が南原の我が別荘に見えられたのは、何年前かの夏の事、講演会のためだった。その日は私の友人たちが約30人参加した。毎夏恒例の我が庭スカルプチャー・ガーデンの集いの日である。

12時に、万平ホテルのダイニングに集合し、まずはランチを楽しむ。軽井沢は欧風な文化の香りが高く、ホテルには100年以上の歴史を持つ落ち着きがある。みなそれぞれにランチメニューを選び、高原の香りと冷気を楽しみつつ談笑した。食後はタクシーで移動する。

南原には民家風の木造の別荘が建っている。現在は使われていないが、人が大勢集まるときだけ特別にオープンし、コンサートなどの文化企画を持つ。ちょうどよい場所である。

マ クミラン氏はアイルランド出身の日本古典文学の翻訳家で、『伊勢物語』や『百人一首』を英訳し、すでに英語圏では名高い方だ。その日の講演は「日本の古典を英語で楽しむ」というテーマだった。細身でスマートな彼はもちろん日本語堪能だ。「日本の文学は世界的に見ても優れています。しかし欧米の『世界の古典文学』の授業で日本文学が取り上げられることはあま

りありません。日本の人々が1500年以上にわたって詠み継いできた和歌には、日本人の精神や文化のエッセンスが詰まっています。日本の奥深い文化を理解するには、古典詩歌や散文を読むことに勝るものはありません。

私が日本の詩歌の翻訳に取り組むようになったのは、世界の人々に日本文学の素晴らしさを伝えたいというモチベーションからでした。しかしこの仕事を進めてゆくうちに、日本人達も私の英訳に関心をもってくださることを知りました。そこで欧米だけでなく、日本の読者にも紹介することに力を注ぐように

かの例を説明された。

「奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞くとときぞ 秋は悲しき」という有名な古今和歌集をあげ、主語の問題を指摘する。「紅葉を踏み分け」たのは鹿か、それとも歌の主人公かと問うのだ。日本語は主語を明示せずとも文を作る事が出来る。しかし英文では主語を置くのは文法上のルールだから、この作品の翻訳は難しい。結局、主語をどちらにも読み取れるような訳を試みたが、そこには人と自然の関係という本質的な問題がある。つまり西洋の詩では、人は自然と対立し眺めている主体になるが、和歌では、人が自然の中において、その中で物事を描写していることがよくある。このように英訳を通して日本の文化的特徴を理解するひとつの例を話された。

蕪村の句に「いかのほり 昨日の空の ありどころ」というのがある。いかのほりとは風のこと、空の風を見ていると、現在ではない過ぎ去った日の空のように思われる、というものだ。ここでの昨日は単純な意味ではなく、重層した過去、深い時間

をあらわす。しかし日本語に昨曰たちという複数形の言葉はないし、英語にyesterdaysという単語もない。詩の中のこの錯綜した時間をどのように翻訳するか。結局、主語をYesterdayとYesterdayとダッシュを多用して余韻を持たせた。句の解



ピーター・J・マクミランさん

釈も難しいが、翻訳も難しい。

講 演のあとはスカルプチャーガーデンでのティータイムに移った。すでに夏の日は西に傾きつつあり、池を囲む樹々を鮮やかに照らしていた。この池庭はちょうどこの時間が一番美しい。人と自然が混然となる…。そして私たちにとって一番楽しい時間は、文化の香りに触れたときである。氏のお話はその日の

私たちの心に一陣の風を運んでくれた。

マクミラン氏は木陰のベンチでクルミのパイをほおばりながら、さらにこんなビジョンを披露してくれた。

「私のライフワークは『万葉集』の翻訳で、トップ100とよばれる欧米の大学生の学ぶ『世界の古典文学』に取り上げられるようにしたいと思っています。翻訳がよければ、原文は素晴らしい文学ですから可能です。また、先年翻訳した『百人一首』は英語のかるたを作り、これから世界にカードゲーム『かるた取り』を広げてゆくつもりです。『百人一首』は恋歌が多いので普遍性があり、各国の人達に受け入れられると思いますよ」

日本文化が外国人に愛されるのは嬉しいことだ。2018年に、私はある会議でブラジルの日系人に出会った。サンパウロに新設されるジャパン・ハウスの代表者である。ジャパン・ハウスとは、日本文化を戦略的に紹介する場として、日本から多額の予算を投じて作られた施設だ。その時のテーマは、ジャパン・ハウ

になりました。翻訳というレンズを通して、日本の文化や文学を考察することは大切です。

翻訳にあたっては原文のリズムを英語に移し替えることに腐心しました。学術的な色彩より、元の詩歌に込められた詩心を伝えることに重点を置いています

マクミラン氏のお話は格調が高く、夏のひとときに集う人々にはいささか難しい。ところが出席者はみなシンとして聞き入っていた。含蓄の豊かな氏の講演は、古典はもちろん英語にもうとい私たちの心に響いたのである。

それからマクミラン氏はいくつスで取り上げるイベントのアイデアについてだった。私は思わず『百人一首』のカードゲーム「かるた取り」を推薦した。するとブラジル代表者がいった。

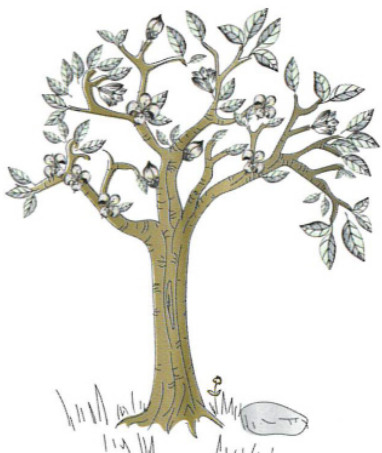
「『百人一首』は今ブラジルで流行していますよ。以前『ちはやふる』という日本のアニメが爆発的な人気になり、その結果カードゲームが流行しました。ブラジルの若者たちは日本語を丸暗記してゲームをするのです。なぜならかっこいいからです。でも各カードの歌の意味はちゃんと理解されていますよ」

なるほど、日本文化のひとつであるアニメの力は凄いと実感した。しかし同時に、私はあらためてマクミラン氏の指摘の正しさを確認したのである。

濃木ここあさん

こき ここあ

エッセイスト。東京都出身。国際文化交流Soya International代表。日本ペンクラブ会員。著書に『漕ぎ出す船、人形の旅』（里文出版）、『ミランダの星』（軽井沢新聞社）など（いずれも本名の森美可で出版）。



イラスト：mop